

～企業コミュニケーションの価値を多面的に高める「場」～

日本には企業博物館が全国に1000はあるとみられています。企業博物館を立ち上げ自ら館長を務めた栗津重光さんが、全国200か所近くの企業博物館の訪問で見出したコミュニケーション価値を、あますところなく伝えます。

昭和ミュージアム

〒579-8047 大阪府東大阪市桜町8番1号 昭和プロダクツ東大阪本部2階

<https://www.marutsutsu.co.jp/company/museum.html>

現在、施設は取引先、社員対象なので、見学希望者は株式会社昭和丸筒（06-6684-8061 もしくは <https://www.marutsutsu.co.jp/> お問い合わせフォーム）に問い合わせること。

【施設の概要】

「昭和ミュージアム」は、丸筒製造専門工場を設立として74年目の記念日、1997年11月21日にグループ会社の昭和プロダクツ株式会社にオープンした。昭和丸筒およびグループ各社の商品の展示場と、歴史資料館の機能を備えた場所で、内装には同社生産の紙管を活用し、展開されている。7メートルもの幅があるショーケースには、創業以来製造されてきた筒やパッケージなど、貴重な製品が紹介されている。

【館内】

「昭和丸筒の製品は基本的に紙管原紙でできた丸い筒」

昭和丸筒の前身である佐藤紙器工業所は佐藤秀雄によって1923年、大阪市で創業された。当初は紙函を製造しており、朝日乾電池から乾電池胴体を受注する。当時の乾電池は四角の箱型だったが、佐藤は紙管の可能性を追究し、紙管に特化した製品づくりに邁進する。その後金属底と紙管を組み合わせて液体に使える容器や継ぎ目がなく表面が平滑な筒などさまざまな丸筒製品を世に送り出してきた。

丸筒の使用用途を拡大させるべく、積極的な営業活動を行った結果、日本酒（「富久娘の『燗番娘』【発熱機能付き】」etc.）、スナック類（「chip-star」「とよすのあられ」etc.）、おしぼり入れ、農協オレンジ50、耳かき付き綿棒…もちろん

以前から利用されていた賞状筒、国旗収納用（胴体が回転し次の祝日「国旗掲揚日」が見える工夫がされており、評判になっていた）等にも使用されている。

「歴史の流れと商品の展開」

ある一つの製品の開発をきっかけに、他の用途への活用が見つかり、さらに発展していくことは度々ある。この博物館でも以下の展示がある。1934年の製造当初は東レの繊維用だった巻き取り用紙管に、磁気テープの巻き取りという用途が見つかり、さらにその後、ビデオテープやカセットテープ用のものまで拡大した。1972年にはヤマザキナビスコのスナック、チップスターの容器として採用される。売り上げは急上昇するが、ヤマザキナビスコ自体が容器も製造することになって撤退する。

同社はいったん受注した製品について、当初の使用用途が減少しても、あくなき利用用途拡大のための追求を続けている。ビデオテープなどに活用されていた紙管は、現在ではスマートフォンや電気自動車などの必需品であるリチウムイオン電池素材を巻き取る製品として利用されるようになった。リチウムイオン電池の正極に使用される素材のアルミを巻き取る紙管、負極に使用される素材の銅箔を巻き取る紙管、さらに正極と負極の間にあるセパレータの素材を巻き取る芯もある。これら部材を芯に巻き取り、リチウムイオン電池を製造している工場に納品するのだ。これらの実物展示に加え、同社の巻芯が効果的利用できる分野例として、セパレータ以外にも「スマートフォンの保護フィルム」「液晶パネルの構成フィルム」「錠剤PTPシート」に利用されているという説明がパネル展示



各種大きさの異なる紙管を提供。

(筆者撮影)

されていた。

巻き取り以外の紙管の用途拡大にも積極的に取り組んでいる。例えば輸送用の紙パレット（APPA パレット）の開発。以前は木製のものが使用されていたが、強度のある軽量天板材——ハニカムボード（薄い紙を連続した六角形の部材——ハチの巣［ハニカム］構造）、補強材のフラットボード、紙製桁材のパルラン（高強度の板材をコの字型に折り曲げ、丈夫な紙管を挟んだもの）これらの組み合わせで作られた軽量のパレットを提案することで、航空便の場合、運賃を15%ダウン（成田—台北で80kgの製品を輸出した場合＝同社調べ）できた。このように重量が節減されることで利用が促進したものもある。

また巻き芯製造技術の応用で商品箱詰めの緩衝材として現在幅広く利用されている発泡スチロールの代替商品として紙製の素材を提案している。時代の要請に応え、脱発泡スチロールを推進しているのだ。

【栗津の視点＝見どころ】

創業以来、丸筒の開発、生産に特化しているという珍しい企業だ。いったん納品し利用され

ていたものを、発注先が独自に作ることになって撤退する際にも諦めず次の用途を研究し、拡大した用途を提案している。東レからの発注では、最初は繊維を巻き取る紙管だったが、ビデオテープやカセットテープに使われる磁気テープを巻き取る芯としても使用されるようになり、さらに現在ではリチウムイオン電池の素材を巻き取るというように、時代に併せた対応ができていることが数々の実物展示とパネル展示から伺うことができる。

基本的に再生紙が原料である。同社は資源のより有効な活用方法として、より高度な再生製品の研究・開発をおこない、ユーザーニーズに対応している企業なのだ。SDGsの考えに則った生産を100年以上に渡って続けてきた企業なのである。

丸筒ばかりでなく、再生紙を使用したパレットの提案など、同社は常に研究開発する姿勢を崩さない。

昭和ミュージアムの観察とヒアリングで昭和丸筒（販売会社）、昭和プロダクツ（生産会社）という企業の優れた経営姿勢がうかがえた。